パネルディスカッション ～より深く、より身近に～

講演会の後、東北大学大学院教授の柳原敏昭さんと東北学院大学教授の七海雅人さんをコーディネーターに、菅野さん、遠藤さん、高橋さん、佐々木さんをパネリストに、「遠藤家文書に見る戦国大名の外交」と題したパネルディスカッションが行われた。事前に来場者から質問を受け付け、その質問に対してパネリストがそれぞれの見解を示した。

「小十郎古文書はあるのか」という質問に対しては、菅野さんは「小十郎宛ての文書は明治以降に散逸してしまった。約30通が東北大学の図書館にある」と答えた。

また、「伊達輝宗時代の外交とはどんなものだったのか」という質問に対して、佐々木さんは「輝宗時代の外交はよく分からない部分がある。ただ、大きな問題が起きなかったことを考えると、政治力に富んでいたともとれる」と話した。続いて高橋さんが「蘆名が輝宗の次男をあれだけ欲しがったことをどのように捉えるべきか。輝宗の存在感を示すものになるのかもしれない」と推測。菅野さんは「南部氏など北の武将との外交文書がほとんどないことをどう捉えるか」と、遠藤家文書の調査が進むことによって新たな展開を期待した。

最後に七海さんが、「遠藤家文書の中には戦国時代の書状のほか、室町幕府8代将軍足利義政の文書など、遠藤家が蒐集したと思われる鎌倉・室町時代の古文書が入っていたことにも、遠藤家の歴史的背景を感じる」と話した。そして、柳原さんが「遠藤家文書は全国的に見ても20年に一度、東北では100年に一度と言っていいほどの大発見である。ぜひ、白石の宝として保存し、多くの人に見てもらえるようにお願いしたい」と、このシンポジウムを結んだ。

やなぎはらとしあき
柳原敏昭さん
東北大学大学院
教授

ななみまさと
七海雅人さん
東北学院大学
教授

遠藤家文書は新しい歴史の扉を開くカギ

今回のシンポジウムは、南奥羽の戦国時代に関係する資料を主に取り上げて行われた。しかし、遠藤家文書は、13世紀から近現代まで幅広い年代の資料で構成されており、今回はその重要性の一端を紹介したにしか過ぎず、その研究も始まったばかりである。

遠藤家文書は今後、資料の整理と研究が進みこれまでの資料との結び付けがなされ、南奥羽の戦国時代をはじめ、幕末維新期などに新たな歴史を刻んでいくことだろう。遠藤家文書は、新しい歴史の扉を開くカギと言っても過言ではない。

白石の宝　郷土の記録と記憶を守る【文化財レスキュー事業】

郷土の歴史を語り継ぐための大切な取り組みです

白石市教育委員会では、東日本大震災により取り壊すことになった蔵や古い建物から文化財を取り出し、保管・保全する「文化財レスキュー事業」を実施しています。建物解体とともに「ごみ」として捨てられていた物の中から、白石の歴史を探る上で重要な資料がたくさん発見されています。一見地味な作業に見える文化財レスキュー事業ですが、このような作業を継続することによって初めて、歴史上の空白を埋めていくことができます。「ごみ」として捨てたり燃やしたりする前に、ぜひご一報ください。「文化財レスキュー事業」にご協力をお願いします。

教育委員会博物館建設準備室（中央公民館内）☎22-1343　Eメール　con-edu@city.shiroishi.miyagi.jp
ＮＰＯ法人宮城資料保全ネットワーク　☎022-795-7693　ホームページ　http://www.miyagi-shiryounet.org/

白石の重要な文化財として、多くの方々が活用して後世に伝えていくことを期待します

ＮＰＯ法人宮城歴史資料保全ネットワーク
ひらかわ　あらた
平川　新理事長
（東北大学東北アジア研究センター教授）

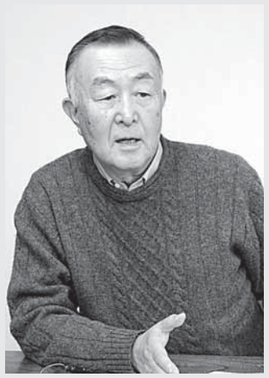
白石市教育委員会より市内にある古文書の調査をしてほしいという依頼があり、一目で大変な資料だということが分かりました。戦国史研究全体としても新たな展開が期待できます。

今回のシンポジウムはその第一歩にしか過ぎません。いろいろな視点から光を当てることで、仙台の歴史、白石の歴史が分かってきます。小十郎あっての白石であり、基信あっての小十郎です。基信は白石にとって大恩ある人物。遠藤家文書は今後、重要な資料として注目されていくでしょう。

これまで貴重な資料群を大切に保管していただいた遠藤家のご子孫に、厚く御礼を申し上げたい。そして、この古文書が白石の重要な文化財として末永い保存と活用が図られ、後世に伝えられていくことを期待しています。

ＮＰＯ法人宮城歴史資料保全ネットワーク：平成15年７月、宮城北部連続地震の直後に発足。県内を中心に歴史研究者・博物館・住民・学生など会員は約150人。発見した古文書は約20万点。東日本大震災後は旧家を訪ね約２万点の資料保全に当たっている。

歴史文化の保存に理解のある方が増え、第二、第三の「遠藤家文書」が発見されることを願います



白石市歴史文化を活用した地域活性化実行委員会
ほそだ　のりあき
細田紀明委員長
（白石市文化財愛護友の会会長）

遠藤家文書の発見と今回のシンポジウムは、私たち白石市民が「歴史」に注目する、非常に良い機会だったと思います。遠藤家文書の重要性もさることながら、今回の調査を通じて、古文書の会といった市民団体と行政、そして研究者の間で一つの協力体制が構築できたことも、今後のさらなる資料発掘や調査につながると思います。

「歴史」は出来上がったものではなく、資料に基づいて作られます。内容を読み解くことは確かに難しいですが、実物を見て歴史を目の当たりにすることが大事かと思います。今回をきっかけとして、歴史文化の保存に理解のある方が増え、第二、第三の「遠藤家文書」のような、白石の歴史資料が数多く発見されることを願います。そうすることで、白石に新たな価値が生まれてくると思います。

白石市歴史文化を活用した地域活性化実行委員会：歴史と伝統芸能の各種団体が一体となって歴史文化事業を推進するため、平成23年に設立。構成団体は白石市文化財保護委員会、白石市文化財愛護友の会、白石古文書の会、白石市伝統芸能振興会、白石茶道会、碧水園。

歴史的遺産を未来へ

遠藤家文書の大発見は、白石古文書の会の会員の地道な活動をはじめ、研究者や行政が一体となって活動したからこそ生まれたものである。共通することは「歴史を大切に思う心」。遠藤家文書を機に、歴史を大切にする人々が白石につどい結ばれたのだ。

「基信は景綱に若き日の自分を見たのかもしれない」。そんな歴史的背景や当時の人間関係などに思いを馳せると、一見、難しく思える古文書も身近に感じてはこないだろうか。

東日本大震災でも、歴史を語り継ぐことの重要性を再認識させられた。その中で、自分に何ができるか。ぜひ、白石の歴史を知ることから始めたい。そして、こうしてつながった「縁」を大切にし、白石の歴史的遺産を未来に残していきたい。

▶主に戦国時代の書状を中心に取り上げた報告書は１部2,000円
詳しくは博物館建設準備室まで